

# 『貼雑年譜』に見る江戸川乱歩と山手樹一郎の交流

影 山 亮

## I

我が国における探偵小説の第一人者といえは江戸川乱歩である、と言っても批判は無いだろう。事実、乱歩は数多くの探偵小説を発表し、数多くの読者を魅了した。そんな乱歩については現在までにこれもまた数多くの論文、書物が存在し、広く研究されている。であるから乱歩が整理魔ともいえる性格の持ち主で、その最たる象徴と言える『貼雑年譜』の存在についてもよく知られていることだ。この『貼雑年譜』は乱歩が自らの身辺について新聞、雑誌記事、書簡、原稿、写真などをまとめたスクラップ・ブックであり、乱歩に関する研究において重要な資料となっている。

さらに他作家との交流についてもこの『貼雑年譜』で確認出来る。交際範囲の広がった乱歩は、自身と同じく豊島区児など、既にその交流が判明している作家の他に、山手樹一郎などの現在ではほとんど知られていない作家との交流もあった。かつて時代小説家として多くの読者から支持され、貸本業界でもまたすさまじい人気を博しながらも、現在では研究が進んでいない山手。しかし乱歩との交流、また二人が名を連ねていた豊島文人会については、件の『貼雑年譜』によってその一部をうかがい知ることが出来る。『貼雑年譜』は現在九巻のうち二巻までしか復刻されていない。よって一般にはその後の巻は見られないが、今回立

教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センターのご協力によって、『貼雑年譜』の三巻から九巻の一部を紹介する。それによって乱歩と山手の交流、また「豊島文人会」についての重要な資料を発掘し、その研究に生かしていくことを目標とする。

## II

『貼雑年譜』について乱歩のご子息の平井隆太郎氏は、

父が暇つぶしかウサ晴らしかで手を着けたのが、写経と自伝資料の整理であった。(略)自伝資料の方は、貼雑年譜と表題し、手作りの製本で、不要になった祖母きくの帯地で表装したものである。自分の生誕以来の資料を貼りこみ、詳細な解説が加えてある。タテ三十センチ、ヨコ四十四センチのハトロン紙で横開き百七十頁ほどを一冊とし、終戦までの分で三冊、戦後は多忙になったにも拘わらず作業をつづけ、昭和三十七年までの分六冊を完成している。

と解説している。またその作成経緯について乱歩自身は『貼雑年譜』の「序」において、

時局のため文筆生活が殆んど不可能となつたので暫く休養する事にした。その徒然にふとこの貼雑帖を拵へて置くことを思ひ立つた。探偵小説を書き出して以来折にふれて切取つて順序もなくスクラップ・ブックに貼りつけて置いた印刷物などを年代順に整理し、その他の古手紙、文反古の類などをもあさつて、ごく大略ながら私の過去を描ひて見た

と書いており、「昭和一六年四月初旬」と結んである。「時局のため」というのは、言わずもがな戦争へと向う世の中では検閲が厳しく、探偵小説が書きにくいということを指している。乱歩は戦時中多くの作品の一部削除を命じられ、「芋虫」にいたつては昭和一四年三月一日に全篇の削除を命じられた。こういったことから、乱歩は探偵小説の筆を一旦置き、『貼雑年譜』の作成に取りかかった。元来の整理魔だったこともあり、戦後、探偵小説の執筆を再開した後も『貼雑年譜』の作成は続いた。その結果、明治二十七年から昭和三年の一卷から昭和三十七年の全九巻という膨大な量のスクラップ・ブックとなった。

そんな乱歩が昭和九年から昭和四〇年にその生涯を終えるまで、豊島区池袋に住んでいたこともまた有名である。

終の棲家となった地で乱歩は、町内会の役員を務めるなど、池袋と密接に結びついていた作家であった。同じ頃豊島区には推理作家の天下宇陀児や、かつて豊島区にあった映画館「人世坐」や「文芸坐」の経営に携わり、サンカ文学でも有名な三角寛など多くの文人が住んでいた。その中には当時の読者から絶大な人気を博しながら、現在では忘れ去られた流行作家の一人という感がある、山手樹一郎という時代小説家もいた。

### III

山手樹一郎（本名、井口長次）は、大正八年より編集業に従事し、昭和二年に博文館に入社。ここでは児童雑誌『少年少女譚海』の編集長として山本周五郎や、村上元三ら多くの作家を鍛えていた。また自身も編集業の傍ら、井口長二の筆名で著作を発表していた。その後、昭和一四年九月をもって博文館を退社して職業作家となり、「桃太郎侍」（昭和一四年、『岡山合同新聞』、合同新聞社）や「夢介千両みやげ」（昭和三年、『読物と講談』、公友社）などの時代小説を数多く発表し、人気を博す。毎日新聞社刊の『読書世論調査』によると昭和二七年から昭和三九年にかけて、「あなたの好む著者、執筆者は誰ですか」という質問の回答

に、山手の名前が毎年二〇位以内にランクインしている。昭和三四年には全体で八位、男性票で五位、女性票で一位という程である。

またその人気は貸本界でも凄まじかった。藤井淑禎氏は『高度成長期に愛された本たち』（平成二十一年二月、岩波書店）において、高度成長期における山手樹一郎の人気ぶりを当時の貸本屋の詳細な調査とともに論じ、「貸本界の帝王」と称している。藤井論が引用している資料は、山手樹一郎の著作の人气が貸本界からもうかがえる最適な資料なので、本稿でも引用する。芳井先一氏の「貸本屋調査から―公共図書館と民衆を結ぶもの―」（『図書館雑誌』昭和三十一年六月、日本図書館協会）内で「人気作家・読まれる本」という調査結果がある。それによると、

蔵書構成はその地域の利用者の要求によってきまる。勿論山手樹一郎の作品はどんなものでも、という共通したものもあつて、中はおおむね限定される。（略）どの貸本屋でも一位山手樹一郎、二位中野実で、三位からは遊興街を除いて、江戸川乱歩、富田常雄、横溝正史、吉川英治、源氏鶏太の順序

となっている。また社会心理研究所「大衆文学の読まれ方―貸本屋の調査から―」（『文学』昭和三二年一二月、岩波書店）によれば、貸本屋へのアンケート調査の結果、「好きな作家」という項目で夏目漱石、江戸川乱歩、山手樹一郎の順でランキンしている。この調査結果からも、山手が時代小説家として絶大な人気を博していた作家だったということが言えるだろう。

そんな山手もまた豊島区の住人であった。

私がいまの要町に移ったのは、当時まだ長崎村北荒井といわれていた大正十三年の五月のことだった。その前年の関東大震災の年の十二月に、父が昔流にいえば四十九で脳溢血にかかって床についていたので、それまでいた官舎をあげなければならず、思いもかけない池袋の奥の麦畑の真ん中へ、小さい家をたてることになったのである<sup>2</sup>。

とあるように出身は栃木県であるが、大正一三年に東京府北豊島郡長崎村字北荒井（現豊島区要町）へ転居し、逝去するまで同地に住んでいた。この地で山手は、数多くの著作を執筆していた<sup>3</sup>。これまで同じ豊島区に住んでいた乱

歩と山手の交流に関しては明らかにされておらず、言及もされてこなかった。しかし『貼雑年譜』を見ることで二人の交流、さらには先に挙げた大下宇陀児や三角寛など、他の豊島区に住む文人たちも所属していた「豊島文人会」なるものが浮き上がってきた<sup>4</sup>。

#### IV

乱歩と山手の交流は、二人が所属していた捕物作家クラブから始まる。このクラブは昭和二四年に発足した。おそらく捕物作家クラブ主催のイベント「捕物まつり」で配布された式次第に、付記されていたと思われる佐々木杜太郎「捕物作家クラブ由来記」（昭和二五年一二月）によると、

ちよつと世界に類例のない珍しい名前の捕物作家クラブは、発起人野村胡堂、土師清二、角田喜久雄、山岡莊八、山手樹一郎、納言恭平（逝去）、横溝正史、城昌幸、村上元三、大林清、松波治郎、藤間哲夫諸氏の呼びかけで、昭和二十四年七月七日涼風薫る稲田登戸の紀伊国屋料亭で、牽牛織女の一年一度の邂逅にちなんだ恋愛（鯉鮎）料理をつつきながら、和気霽靄裡に発会式を挙げた。もとは人形佐七捕物帳の作者横溝

正史氏と、当時小説の泉編集長藤間哲夫氏が酒興の話題から発展して、さらに探偵作家クラブ会長江戸川乱歩氏が、大いなる火つけ役となつて、捕物小説の元老野村胡堂氏を焚きつけあふつたので、たちまち、茲に捕物作家クラブなる、作家、画家、芸能家、出版関係者をふくめた懇親的なクラブが誕生することになった次第である（図1）

とある。この文章と式次第は共に『貼雑年譜』四巻に貼られている。ちなみに捕物作家クラブは後年、日本作家クラブに形を変えており、山手は昭和三九年八月に同会の会長に就任している。

さて同じページに昭和二五年一月二五日付『豊島新聞』（豊島新聞社）の「乱歩大いになう 豊島文人懇談会」という記事も貼られている。この記事によれば、

豊島文人懇談会は江戸川乱歩、原久一郎、大下宇陀児、三角寛、山手樹一郎、春山行夫、瀬川駿、阿部静枝、花岡謙二、竹内雷男氏等の世話人の名で約四十名の文芸家に案内状を出され：（略）なお豊島文芸家を打って一丸とする豊島文人会（仮称）結成へと同会は

一歩前進することを申合せて十時散会した（図2）

とある。乱歩と山手以外の面々も豊島区在住、もしくはかつて豊島区に住んでいた作家、政治家たちである。また四巻の違うページには「豊島区在住作家忘年会」の広告が貼られている（図3）。ここにも乱歩と山手が名前を連ねている。この忘年会もまた「豊島文人会」の前身の会合と言えるだろう。つまり「豊島文人懇談会」↓「豊島区在住作家忘年会」と形を変えながら、昭和二十七年に「豊島文人会」が結成される。この記事以外にも『貼雑年譜』六巻には昭和三十一年一月二二日付『豊島新聞』、昭和三十二年一月二七日付『豊島新聞』の記事が貼られており、「豊島文人会」の模様が報告されている（図4）。ちなみに乱歩は、「わが故郷は池袋」（『今週の池袋』昭和三四年六月）において

この辺には文士とか画家、彫刻家などが多く住んでいる。最近はだんだん減りつつあるようだが、それでも豊島区に住んでいる人達で文士会というのがあって、ときどき集まるけれども、山手樹一郎、春山行夫、大下宇陀児などもそのメンバーだ

と書いており、「文士」という語を使用している。しかしそれ以外では「文人」という語を使用しているため、「豊島文人会」が正しいと思われる。

『貼雑年譜』には「豊島文人会」以外にも、乱歩と山手の交流がうかがえる資料がある。それは六巻にある昭和三二年五月一九日付と、七巻にある昭和三三年五月一九日付『豊島新聞』の記事だ(図5・6)。この記事は前年度における豊島区の高額所得番付を伝えている。前者の記事では、「昭和三二年度の申告所得額における豊島区の番付が発表された。これによれば昨年に引き続いてトップは作家の山手樹一郎(本名井口長次)氏」とあり、「一八〇一万井口長次(要町一の四七)」という箇所には傍線が引いてある。後者の記事では、「二位は捕物帖で名じみの深い小説家山手樹一郎氏(本名井口長次氏)の二千百一万円」という箇所と同じように傍線が引いてある。この傍線はおそらく乱歩が引いたものだろう。自分の名前や他の作家にも引いている箇所があることから、この傍線は乱歩が親交のある人物の名前に引いていると考えられる。これもまた同じ豊島区に住む乱歩と山手に交流があったという興味深い資料の一つである。

## V

これまで紹介してきた資料の他にも『貼雑年譜』には、山手が発起人の一人として名前を連ねている昭和二九年一〇月三〇日に東京会館で行われた乱歩の還暦祝賀会の案内状や、前述した捕物作家クラブが主催した遠山金四郎百年祭の式次第なども貼ってある。

また乱歩と山手の交流は、作品にもその一端を見ることが出来る。山手に「少年の虹」という作品がある。この作品は昭和三三年一月二日から一二月四日まで『朝日新聞ジュニア版』(朝日新聞社)に連載された子供向け時代小説で、賢一・又太郎・弥太・三太という十代の少年たちがまぼろし組なる強盗を追いつめ、最後は遠山奉行が捕縛するというもので、まさに山手版「少年探偵団」と言える内容である。これは、同時期に少年探偵団もので子供から絶大な人気を博していた乱歩からの影響と考えることが出来るのではないか。

共に豊島区に居を構え、その地を終の棲家とした探偵小説の第一人者と時代小説の人気作家。大衆小説界をリードした二人の交流、さらには同じく豊島区在住の文人が名を連ねた「豊島文人会」の存在を窺い知ることが出来たのは、



乱歩の常識外れと言える整理癖の産物である『貼雑年譜』であつた。

## 【註】

1 平井隆太郎「乱歩の軌跡…父の貼雑帖から」（平成二〇年七月、東京創元社）

2 山手樹一郎「あのことこのこと 五」（『山手樹一郎全集』二四卷月報、昭和三十六年一月、講談社）

3 山手樹一郎に関する研究は現在ほとんど進んでおらず、その象徴が著作年譜であつた。管見の限り山手の年譜は一本あるが、八木昇「山手樹一郎年譜」（『大衆文学大系 二七』昭和四八年七月、講談社）は他のものに比べ格段に詳細なもので、昭和四七年まで記載があり、誤りや抜けている著作はあるものの、多くの著作は初出月まで記載されており、またいくつか単行本の出版社の記載もある。初出月まで記載している年譜は、先にはもちろん、後にも八木氏のそれのみである。だが全著作に記載されているわけではないし、誤りもあった。そのため山手樹一郎最初の著作は、昭和三年七月に博文館『少年少女譚海』に発表された「大剣聖荒木又右衛門」とされてきた。しかし今回の調査によつて、大正六年に博文館『幼年世界』に発表された「鸚鵡の声」が山手樹一郎最初の著作だと判明した。豊島区に転居する以前の著作は、この「鸚鵡の声」を含めて六作であり、残りの六〇〇以上の著作を豊島区で執筆したことになる。詳しくは拙稿『新・山手樹一郎著作年譜』およびその製

作過程」（『立教大学大学院日本文学論叢』第一三号、立教大学大学院文学研究科日本文学専攻）を参照されたい。

4 「貼雑年譜」以外で乱歩と山手の交流に関しては、『大衆小説』五卷十一号（昭和三四年七月、双葉社）でうかがうことが出来る。この号は山手樹一郎、還暦記念号と題され、椿山荘での山手の還暦パーティーの様子が写真で伝えられている。この中に、乱歩が挨拶をしている写真がある。またこの還暦パーティーの乱歩宛の招待状も、立教大学旧江戸川乱歩邸に保存されている。

5 昭和三〇年三月二七日付「豊島新聞」の「豊島文人会 三〇日に大江戸で」とよると、「来る三月三〇日午後六時から恒例の「豊島文人会」が大江戸（池袋三業地入口）において行われる。この文人会は昭和二七年大塚寿々村において第一回の産声をあげて今日まで毎年行われて来たもの。発起人としては江戸川乱歩、原久一郎、三角寛、大下宇陀児、春山行夫、阿部静枝、豊島新聞社（社長竹内雷男）の諸氏。なお出席申込みの方は本社まで会費十円」とある。このことから「豊島文人会」が昭和二七年に正式に結成されたと分かる。

また「豊島文人会」については、拙稿「豊島文人会」と池袋「麦畑」から「アプレ盛り場」へ」（『立教大学日本文学』第一一号、立教大学日本文学会）も併せて読んでいただきたい。

6 文芸評論家の石井富士弥氏は「山手樹一郎長編時代小説全集」別巻一（昭和五五年三月、春陽堂）に併収されている「竜虎少年隊」に関して、「幕末の大江戸の怪盗団を夜警する山手版『少年探偵

団」と述べている。少年たちが怪盗ふくろ組から江戸の町を守るという内容から確かにそう言えるかもしれない。しかし本稿で提示した「少年の虹」は遠山奉行が、乱歩の少年探偵団ものにおける明智小五郎の役割を果たしており、そういった点でも「少年の虹」が、より乱歩の影響を受けているのではないかと指摘した。

ちなみに「少年の虹」の詳細な初出年月は今回の調査によって判明したものである。

(立教大学大学院博士課程後期課程)

第二回 師の参り、三上寺に於て上人と其の清むし



捕物作家クラブ

由來記

佐々木杜太郎

[illegible]

(圖 2)

乱歩大いにうたう 21 25

豊島文人懇談会

本館三樓爲島文人懇談会は江戸川角寛、山手櫛一郎、春山  
乱歩、頃久一郎、太下宇陀児、三川駿、阿部静枝、花岡巖

[illegible]

宴たけなわの文筆者の集い  
19日 大塚 鈴む良において



(図3)

**豊島區在住作家忘年会**

並に俳人・詩人・画家・彫刻家・新聞雑誌関係者等

25.12.17

このたび江戸川乱歩、大下宇陀児、三角寛、岡田三郎、柳山潤、瀧川巖、坪田巖治、橋爪彦七、山手樹一郎、阿部静枝、長谷川起謨氏などの肝入りでこの二十三日の午後五時から池袋三業地入口の大江戸で豊島區在住作家の忘年会が催されることになった、これを機会に本社が掲唱して豊島區在住の画家、彫刻家、詩人、俳人、新聞雑誌の関係者等一同の文化人大懇談会に致すことになりまし

**文化人の  
大歓談会**

た、一々御案内状は差上げませんが是非これらの方々の御来会をお願い申し上げます  
なお仕度の都合もありますので御出席の方は本社の係まで一報頂きたい存じます

日 時 十二月廿三日  
土曜日 午後五時

場 所 池袋三業地入口大江戸  
会 費 一五百円也

**豊島新聞社**

(図4)

**豊島文人会**

廿五日 大江戸で開く  
豊島文人会では廿五日六時から池袋大江戸で岡田宗司氏、阿部静枝さんの帰郷報告会を開催した。参加者は牧野吉晴、井上たけし、江戸川乱歩、原久一郎、柳山潤、三角寛、田中佐一郎、竹内雷男の各氏（順不同）で、先に重光外相と共に国連に行った岡田氏、アジア社会院会議でインドに行った阿部

さんからそれぞれ現地の報告があり、歓談のうち十一時散会した。



大江戸で開かれた豊島文人会

# 高額所得番付

山手氏 一千八百万円でトップ

上部は動かず

[illegible]

# 豊島区の長者番付

最高は小野田氏、二位山手氏

皇鳥の所得10傑		円
① 小野田 忠	昭和5〜77	24,650,089
② 井口 次夫	昭和1〜47	21,018,300
③ 後藤雄五郎		16,036,983
④ 中村三男吉	皇鳥6〜1538	10,440,579
⑤ 後藤 武雄	池袋2〜855	8,877,777
⑥ 藤沢 武夫	池袋2〜1023	8,425,467
⑦ 西 濱	千早町2〜26	8,430,039
⑧ 笠原三九郎	池袋3〜1557	7,811,069
⑨ 小林 誓一	高田本町1〜1371	7,552,200
⑩ 高橋 真男	目白4〜41	7,487,805

八百四十三万⑧小笠原三九郎氏七  
百八十二万⑨水林繁一氏七十五  
万⑩高橋貞典氏七十四万八千と  
いふなり。

以下順に名じみの誤い人々をあげ  
ると、恩田五作氏が五百万円で三  
十五位、岩崎愛吉氏が四百万円で  
四十八位、富田家具店の主人菊  
一氏が三百三十八万円で七十二  
位、山下虎造氏が三百三十二万

昭和三年の所産は、  
三月十二日飼割れ、如く  
これより、昨年度産一萬月  
を産た人は、養鳥務調査で  
は言を産る處で、不産の  
長野中氏で、千四百六十五  
羽、二位は、野田金（金井）  
小四郎（千田）二位は、  
長谷氏の千四百五十二  
と、佐藤氏では、千四百  
四の佐藤氏、自千七百四  
の佐藤氏、千四百六十五

豊島区の長者番付 二万五千人  
最高は小野田氏、二位山手氏

**KRテレビ**  
テレビ朝刊◇.10スポー  
テレビ幼稚園 谷裕子

で七十五位、田村權太鮎民が二百七十七万円で百十五位、伊藤弘雄氏と野村謙雄氏、横田四郎氏が仲よく二百四十五万円で百四十位あたりとなっている。

なおこれらの人々はいずれも個人所得で会社関係はこの上に行く事だろう。豊島のベストテンは調査の通り。